H23 5 10
No.1

平成２３年度 久原小学校校内研修推進プラン

ハイライト：

・まずは、昨年度の取組について成果と課題の明確化を図ります。

・本年度の方向性について焦点化、重点化を図ります。

・無理のない、無駄のない、ムラのない三無主義に徹した日常的な校内研修推進をめざしましょう。

・一人一人が目標設定をして、課題意識が明確な授業実践に取り組みましょう。

研究の第一歩は振り返りと現状把握です。

研究推進にあたり、まずは平成２２年度の研究テーマ「基礎的・基本的な知識や技能の定着・維持を図る学習システム」の達成度と、具体的な手だてを明らかにすることが必要です。

具体的には、国語部会において、「読む力の定着度と実践した手だての有効性」、「書くことと読むことを連動させたことによる読みの力の向上の程度と、その具体的な手だての有効性」、「単元構成の有効性」、「論理的思考力を働かせ読解させることの有効性と具体的な手だての有効性」などこれまでの研究を振り返ることが大切です。また、算数部会においても、「少人数指導、習熟度の程度に応じた形態、内容・方法の検証」、「学習ノートづくりによる表現力向上の程度」、「ペア交流、全体交流を通した説明する活動の有効性」などを明らかにする必要があります。

一連の振り返りを通して、久原小学校の課題性が明らかになってきます。この課題把握を通して平成２３年度の研究テーマを策定し、効果的な研究推進を可能にしていきます。もし、振り返りの過程で、課題が多い場合は、前年度のテーマを踏襲しながら、サブタイトルの具体化を図っていきます。昨年が「習得」だから安易に本年度のテーマを「活用」に移行するのは少し急ぎすぎかもしれません。

年度初めのこの機会を捉え、研究の振り返りと現状認識を行い、全職員で共通理解していきましょう。さらに、昨年度実践した内容を再構成して副主題の焦点化を図った方が有効だと考えます。国語（４つ）、算数（３つ）の研究の視点をそれぞれが、課題性のある２つ程度に絞り込み、焦点化による研究推進を図りましょう。

共通理解を図ったら、組織づくりを進めます。

共通理解を図ったら、校内研究を具体的に推進する組織づくりを見直します。昨年度は、国語部、算数部、特別支援部に分かれていることで、主題研究の共有化を十分に図ることができませんでした。三方向に向いたベクトルをリンクさせる必要があります。また、本年度は、町道徳授業交流会、地区家庭科研があります。主題研究と道徳授業研、家庭科授業研を混在して行うと、主題研の重点的な推進が困難になってしまいます。

そこで、本年度は、「低学年部」「中学年部」「高学年部」に分かれて研究を推進していきます。

これは、児童の発達段階に応じた組織化となり、チームとして研究の推進を図ることが可能になります。研究を推進するにあたって、効果的、効率的な組織となります。

研究推進委員会の組織については、校長、教頭、主幹、研究主任、そして各部の代表３名で構成することで、機動性を高め、効率的にすすめていきます。学力向上部長は、状況に応じて参加する体制をとっていきます。

なお、「道徳教育実践交流会」「家庭科地区研」は、主題研で育った子どもの姿を出す場として位置づけ、取り組みましょう。

組織的研究推進によるアプローチ形成

各部において、国語、算数の２教科について全員で、副主題の具現化に向けて検討して、学期に数本ずつの公開授業を実施していきましょう。その際、部会ごとに協議会を位置づけ、指導主事等、外部講師の招聘による指導助言を受けていきます。また成果と課題については確実に整理しておくことが大切です。各部会での研修内容については、夏期研修会を企画し、その中で各部からの「これまでの実践と今後の方向性」というタイトルで実践交流会形式の研修会を実施することで、学校全体での研究の共有化を果たすことができます。

夏期研修会で明確となった課題をもとに２学期に再度、数本の公開授業を実施することで、主題研究における財産の蓄積を可能にしていくものと考えます。

そして、３学期は、１～２学期の実践を学校全体で検証する場としていきます。学力向上部長の参画により、様々な角度から久原小の学力向上の傾向を分析、考察していきましょう。検証の方法としては、年間テスト結果のデータ分析、児童の自己評価、教師の自己評価、または、外部評価等が考えられます。

２つのアプローチ形成による双方向の研究推進が着実な進歩を創ります

日常的研究推進によるアプローチ形成

校内研究推進の鍵は、研究の日常化にあります。研修会が目的で終わってはならないのです。研修会は日常の授業づくりに生きて働く手段にならなければ、効果的な研究推進はあり得ません。そこで、各部による研究推進と同時に日常的な研究推進のアプローチ形成が重要となります。各部で研修した内容を全教師が日常の授業づくりで活かす方策を構築することが大切です。

具体的には、定期的に「授業参観指導月間」等を設定して、管理職、教務主任等が中心となって、参観指導を実施します。

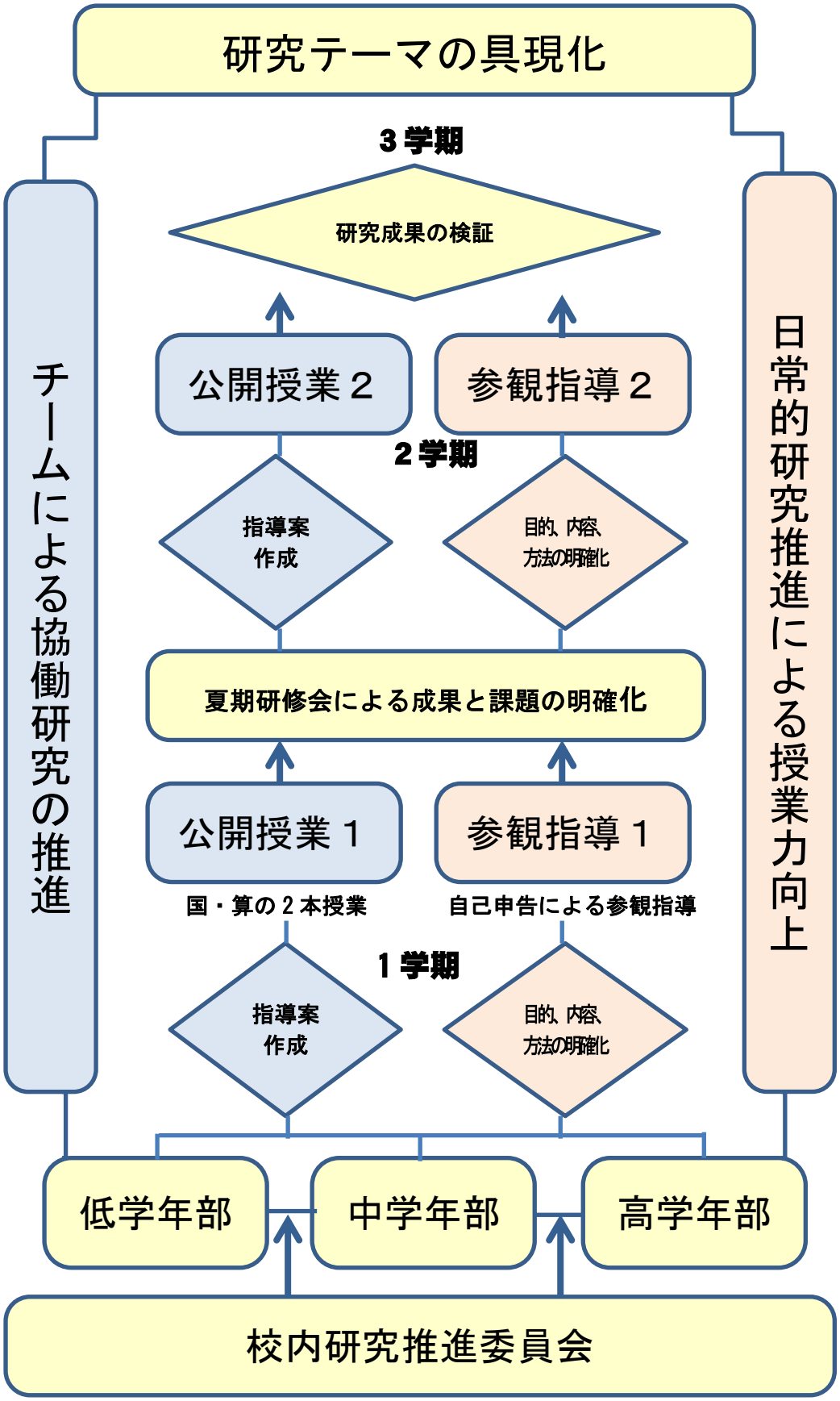
そして、授業者は、参観者に対して「本時の私の授業は、研究テーマの〇〇を目指して、△△についての学習内容を■■の方法で実施します」とはっきりと言える習慣を身につけることで、主題研究に即した日常的授業実践が可能となってきます。参観指導については、指導案の作成の必要もありません。前述した内容を授業者が明確にもった授業づくりを推進していくのです。

小さな成功を重視した研究推進

授業づくりを行っていく際に、よりよいものを目指して、様々な手だてを工夫していくことは、必ず、子どもたちの学力の向上につながっています。

しかし、授業づくりが思うように進まずに、悩むこともあるでしょう。困った時は、一人で悩まず、一人で抱え込まず、その都度、周りの先生に相談することです。それが協働的研究推進となります。決して背伸びをせず、小さな成功を重視した研究推進を心がけることが大切になってきます。何が出来なかったのかよりも何が出来たのかを大切にしていきましょう。

チーム力を生かした研究推進組織へのアプローチ



一貫した研究テーマに基づく授業づくりを 2 方向からのアプローチで